



元気っ子

N o 349 ながさわ保育園

園 長

中 瀬 弦 偉

9月号は、中休みとして毎年、全国高等学校野球選手権大会ネタについて書かせていただいております。興味関心のない方はどうぞ活字から離れて今月はお休みください。

さて、今年の夏もたくさんのドラマがありました。DH制やクーリングタイムはすでにセンバツや昨夏から導入されましたが、今夏からは甲子園で初の女性審判員が登場しました。またビデオ判定も今夏からの導入です。効果的に活用している高校もあり、賛否はありますが、個人的には時代に合った制度かなと思います。

このビデオ判定ですが、健大高崎（群馬）と有明（熊本）の準々決勝第四試合にドラマチックな決着がありました。両校一步も引かず延長TBにもつれ込んだ10回裏のホームクロスプレーがビデオ判定になりました。結果は健大高崎のホームインが認められ、1-0で健大高崎の勝利となりましたが、今大会の有明旋風は高校野球ファンのみならず、被災地にも勇気をもたらしてくれたことと思います。

また久々の出場となった拓大紅陵（千葉）にもドラマがありました。千葉大会の決勝は好投手門倉くんを擁する専大松戸との対戦でした。1点ビハインドの拓大紅陵は最終回に四番の片岡くんが逆転の3ランを放ち、見事千葉大会を制しました。この3ランを放った片岡くんですが、実は父が前回2002年に拓大紅陵が夏の甲子園に出場した際に同じく四番打者を務めていました。三回戦で惜しくも仙台育英（宮城）に敗れましたが、アルプススタンドの大応援団による「チャンス紅陵」はとても印象的でした。

9年ぶりとなる準決勝に進出した天理（奈良）にも「ドラマ未遂」がありました。今大会2本塁打の成績を収めた金本くんですが、実は双子で、兄の凱将くんは愛知の名門東邦に在籍していました。もし愛知大会を東邦が制していれば、組み合わせによっては双子対決が実現していたかもしれません。また兄弟関係ではありませんが、三回戦で対戦した健大高崎の石田（雄）くんと佐野日大の鈴木くんは中学時代栃木県選抜として共にプレーをしていました。また準決勝で対戦した智辯和歌山（和歌山）と横浜（神奈川）には愛知の東海中央ボーイズでチームメイトだった小野くん、江坂くん（ともに横浜）、山田くん（智辯和歌山）がいました。東海中央ボーイズ時代はBIG5として進学先が注目されていました。

甲子園では三重に初戦で敗退してしまいましたが、松商学園（長野）にも忘れられないエピソードがありました。長野大会決勝で都市大塩尻に4-1で勝利し、優勝監督インタビューで松宗監督が語ったのはベンチ入りできなかった3年生への労いでした。「スタンドにいる3年生。メンバー発表の日に、色々心が揺れ動いたと思います。でもその時に「チームのために何でもやります」と言ってくれたその言葉。（松商学園の）連覇の要因は、君たちです。」スタンドで声を枯らして応援していた3年生の気持ちが報われた瞬間だったんじゃないかと思います。

ドラマやエピソードは尽きません。横浜の織田くんが甲子園最速更新（写真参照）をし、智辯和歌山の楠本くんが、その織田くんから放った確信歩きの本塁打、白樺学園（北北海道）後藤くん・金井くんの二年生二遊間コンビによる華麗な併殺プレー、横浜元監督の渡辺元智氏の突然の訃報などなど。尺が足りませんので、続きが聞きたい方はお声がけください。最後に、5年ぶり4度目の優勝を飾った智辯和歌山高校、本当に強かった！優勝おめでとうございます！